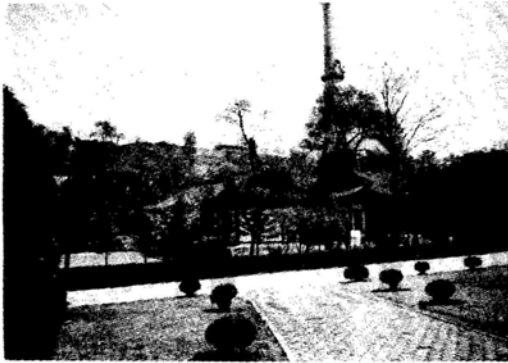


北朝鮮レポート

立教大学産業関係研究所 田 辺 義 明（静岡県）

平壤再訪 ■ ゴールデンウィークも始まろうとする四月二十九日、名古屋国際空港一番サテライトには、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の高麗航空ツポレフ一五四M型が筆者を待っていた。隣には大韓航空のエアバスが翼を並べていたが、両機を一枚の写真に収めることができたのは幸運だった。

高麗航空機は日本海の上空を経て、シベリア回りで平壤に着いた。韓国の防空識別圏を回避してのルートであるが、二時間半とは近い。時差もない。機内では終始革命歌が流され、さすがに北朝鮮上空に差しかかると、スチューワーデスから写真の撮影を制止された。



（龍華寺）

筆者は自称「中国社会学者」である。中国への妙な「貞操観念」からか、北朝鮮への深入りは避けてきた。とはいっても、今回は二度目の訪問である。前回は、金日成主席存命当時の一九九一年七月だった。その時は半月の間、北朝鮮の各地を視察して回った。同行者は二松学舎大学における筆者の前任教島津猛教授で、二人旅といっても教授は高齢のため宿舎に留

まり、労働党の高官や専門の農業政策担当者との面談に明け暮れていた。筆者はその間自由に各地を歩き回った。とはいっても社会主義流でいうレポ（レポート）、外事弁公室係官の俗称、つまり監視人）付きであったが――。

今回は社会状況の視察が目的で相手政府招待の一週間の滞在であった。平壤到着は夕方の退勤時であった。労働者が隊列を組んで、帰路を急がず道端を歩いている。住宅は労働者用が五階建て以上を標準として、三〇階建のものもある。そのような高層建築が果てしもなく続く。例外だが一〇〇階建てという化け物屋敷まがいのものもある。自動車は極端に少ない。交通信号器などはもとよりない。自転車も見当たらないのが不思議であるが、後に政府高官にたずねたところ、農村に向けて生産が行われているとのことである。

仏教寺院を訪れて■筆者のかつてよりの希望で、平壤市内の寺院を参拝できた。そのつもりで、日本から念珠もたずさえていた。寺の名は龍華寺という。静岡県清水市に同名の名利があり、それは「りゅうげじ」と呼ばれているので、いまの場合もそう呼ぶことにしたい。大きな寺ではなく、本堂と庫裡だけが公園のなかにある。パリのものよりも一〇メートル高いといわれる凱旋門のすぐ脇にあり、公園に遊ぶ人々が多いが参詣者はいなかった。石塔が二つある。宗派は曹溪宗で、北朝鮮には他の宗派はないという。

応対に出てくれたのは朝鮮仏教連盟中央委員会責任指導員を名乗る三〇代程の男性で、僧衣はまもっているものの住職ではないという。僧衣の内の襟元から労働党の制服がのぞかれた。話によると住職は急病で、本堂に臥せっているという。したがって本堂へは入れなかった。

この寺の裏山に仏教連盟の本部ビルがあり、彼はそこから来たの



(寺で応対に出た有髮僧衣の労働党员)

だと筆者と親しい労働党员が教えてくれた。責任指導員氏の話によると国内で仏教徒は約一万人、そのうちこの寺の信者は三〇〇名だという。檀家という制度はない。葬儀などもここで行われるというが、信者のなかに政権党の労働党员は一人もいないという。これはこの国の政治制度を理解しないと難しいのであるが、労働党、社会主義青年同盟、朝鮮天道教など、大衆団体には二重帰属が許されなためである。仏教連盟もそうした団体のひとつなのである。

この寺に来てみて、なんと漢字を発見した。朝鮮文字と漢字を併用している韓国とは異なり、北朝鮮は漢字を全て廃止してしまっているため、若い人は大学の文系を出しても漢字が読めない。筆者は、前回は前回も漢字に出くわさなかったが、しかしこの寺には漢字があるではないか。はたして経典は何の文字で書かれているのかと期待したが、「八万大蔵経」があるとの答えだけで見せてもらえなかった。もうひとつ漢字の例外があった。街を走るバスに「中国贈呈」と大きく書かれていた漢字である。中国の援助物資なのであ

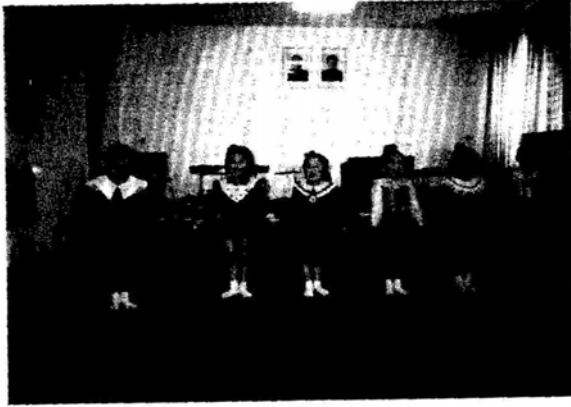


(龍華寺の寺名を刻んだ石碑)

ろうが、中国らしく、つましやかでないところがいい。

現在の市民生活■宿舎に着くと部屋にはロソクとマツチが用意してあった。それも使いかけである。筆者はかつて中国の田舎町を旅して回り、同じ経験があるのでさして驚きもなかった。大学での「発展途上国社会論」の講義でも、各国のインフラストラクチャーについては常にそのような状況であると論じていた。したがって私は、宿舎の部屋のロソクの場所をしっかりと覚えておいた。すると案の定、入浴中に突然電気が消えた。そこで裸のまま、手探りで灯をとる事になった。はたして鏡の中に、薄明かりの光に照らされた自分の裸体が映ったが、気色のいいものではなかった。

市民の足は地下鉄、路面電車、トロリーバスである。いずれも電気駆動であるから、ひとたび停電になると街は交通マヒであった。停電は三時間も続いたが、地下鉄の乗客は地下のトンネル内に閉じ込められたままだったのであろうか。翌日もまた、予告なしの停電があった。



(子供達が歌で歓迎してくれた)

治安、そして：■日本の保守派マスコミの筆頭S新聞が、北朝鮮での民衆暴動と、それに対して治安部隊が警戒体制に入ったと報じた話題になったが、筆者は、社会的緊張状態にある北朝鮮に暴動など起こり得ないと考えている。適切な例えではないが、戦時中の日本で食糧暴動など起こり得たであろうか。北朝鮮の治安は極めてよい。五年前には見なかった白バイが、

大切な食生活についてふれてみよう。数年前、日本が米不足になったとき筆者は北京に滞在していた。報道に接した中国社会科学アカデミーの学者達から、「日本は食糧不足で、さぞお困りでしょう」と同情を集めたものである。しかし現実には、日本ではご存じのような程度であった。

いまの北朝鮮の場合、事態は日本と比較にならないほど深刻のようである。四月一日付けの『朝鮮時報』は、一日一人あたりの穀物配給量が六〇〇グラムから四五〇グラムになったと伝えている。これを書いたのは欧米人のジャーナリストであるが、いつの時点と比較してのことかは不明である。しかし看過し得ない事実である。子供達に米はもちろん、ケイキを存分に食べさせてやりたいと思った。

交通取締をやっているもの珍しかった程度である。

労働党中央委員会の某最高幹部が、「とにかく工場を動かさなければ。今は議論の段階ではない」といった言葉が記憶に生々しい。中露両国もドルかペーターの取引しか応じてくれないという。しかしドルもなければペーターの品もない。その幹部は、「石油がないので自動車も動かせない」と強調した。当然、戦車や戦闘機なども安易に動かすことは出来ない」とみた。有事に持久戦など可能な状況ではない。その点では、北からの韓国への武力進攻は考えにくいと思われる。

最後の日、平壤のニュータウン光復街の幅一二〇メートルの道路の中央で、労働赤衛隊(民兵)が三〇人ほど、AK四七小銃を手に早駆けをしていた。そしてその脇を、ドアを開けたままの路面電車が通り過ぎて行った。